

VI. 本学の成績評価システムと学習の質の保証

1. 成績評価の目的と望ましい成績評価

個性、特色、果たすべき役割などを明示した本学のビジョン「北海道科学大学の基本姿勢」に

3. 教育目的

時代の要請に即した専門領域で輝きながら、北海道およびわが国の活性化を実質的に支え得る21世紀型市民を育成する。

4. 教育指針

学科ごとのきめ細やかなカリキュラム、教育指導により、

- ① 専門領域の基礎知識群とそれらの自然や社会、歴史との繋がりを含めた知識の枠組みを獲得する、
- ② 自ら学習する能力(学習力)を身につける、
- ③ 社会における自らの役割を認識し、倫理観を醸成する、
- ④ 自らの専門能力を高め、あるいは広げる、
- ⑤ 専門能力を社会に役立てるために必要な関連知識とスキルを獲得する、

ことを支援する。加えて、組織的な教育効果の検証と、カリキュラムの改善を続け、教育目的を達成する。

5. 教育の特色

[1] 学生の立場に基づく教育

【教育システム】 ・ 専門領域ごとに最適設計された教育・学習プログラム

と掲げられています。この「本学の基本姿勢」に沿うべく、成績評価の目的を「プロフェッショナルへのいざない」に設定します。この目的のための望ましい成績評価は、次のようなものです。

- ・ 得意専門分野を見つけ易い成績評価
- ・ 専門適性のスペクトルを知りやすい成績評価
- ・ 得意分野を活かす知力のレベルを把握しやすい成績評価
- ・ プロフェッショナルとしての教養レベルを把握しやすい成績評価
- ・ 達成感を獲得しやすく意欲を湧出しやすい成績評価
- ・ それ自体で「学修の質の保証」の一端を担い得る成績評価

2. 成績評価項目スキーム（基本構成）

◎ 科目群を2種類に区分します。

- ・ 専門科目 : 時代の要請に即した専門領域で輝きながら、北海道およびわが国の活性化を実質的に支え得るための専門科目（2年次以降開講の専門教育科目、但し1, 2年次に同内容で実施の重複開講科目[a, b科目]の2年次b科目を除く）
- ・ 活性化科目 : 専門科目の修得を支援する科目＋得意分野を活かす科目＋教養科目（上記専門科目以外の卒業要件科目、教職科目もこれに準ずる）

◎ 成績評価項目（保証すべき質の内容＝保証対象能力）を類型化します。

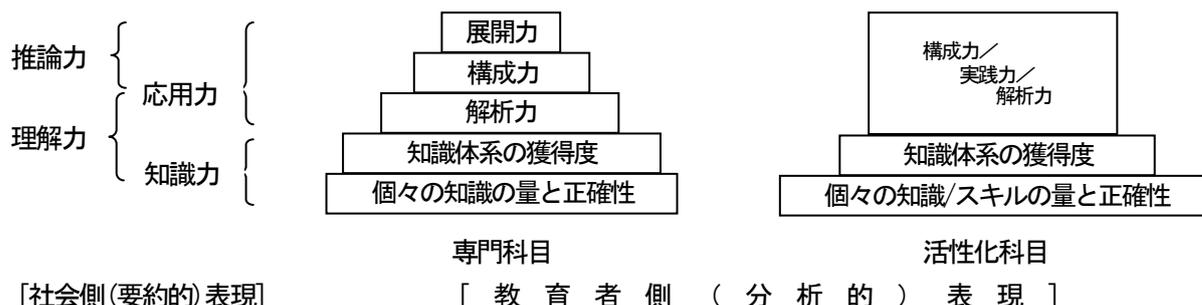
- ・ 個々の知識/スキルの量と正確性
 - 学術系： 概念、測度(単位を含む)などの個別的知識の量と質
 - 言語系： 語彙、熟語の量・質、文法の正確性
 - 体育系： 個々のプレーの量・質、ルール把握の正確性
- ・ 知識体系の獲得度
 - 学術系： 個別の知識間の対応関係や測度間の定量的関係の獲得度
 - 言語系： 定型表現例の獲得度、類似表現との差異の獲得度、
発音・アクセント規則の獲得度
 - 体育系： 運動理論の獲得度、連係プレーの獲得度
- ・ 解析力
 - 学術系： 種々の条件が与えられた場合における結果を導出する能力
- ・ 実践力
 - 学術系・言語系・体育系： 獲得した知識体系を具体例に活用できる能力
- ・ 構成力
 - 学術系： 多ステップの導出プロセスを選び連結させながら解に到達できる能力
与えられた目標を満たすための条件群や論旨を組み合わせ、構成する能力
 - 言語系： 文を組み合わせて目的を満たす論旨を表現する能力、コミュニケーション能力
 - 体育系： ゲームを構成する能力、コーチング能力
- ・ 展開力
 - 学術系： 獲得済みの知見から予測不可能な知見へ展開できる能力

◎ 成績評価項目の類型化は、次の効果を狙っています。

- ① 全科目を通して獲得すべき能力構造を明示することにより、教員と学生が本学の教育目的を達成するための教学スキームを共有化できます。
- ② 学生が各科目の授業内容・試験内容などを類推でき、始講時から授業への構えを整えやすくなります。
- ③ 異質科目間での相互検証が可能で、授業内容・試験内容が発散的になるのを防ぐことができます。
- ④ 新科目の開設に際してもその授業内容・試験内容に指針を提供できます。
- ⑤ 全教職員が統一的な考えの下で学生の教育・学習指導にあたることによって、学生諸君の資質向上意欲を持続・高めることを支援できます。

◎ 成績評価項目基本参照モデル（「学修の質」の定性モデル）

本学での授業、学習を通して獲得すべき能力構造を以下のように階層的にモデル化して考えます。



◎ 各成績評価項目と評価手段の基本的な関係は、次のようになっています。

[専門科目]

成績評価項目	評 価 手 段				
	小テスト	中間試験	期末試験	レポート / 提出課題	
個々の知識の量と正確性	↕	↑	↑		↑
知識体系の獲得度		↑	↑		↑
解析力		↑	↑		↑
構成力		↑	↑		↑
展開力		↑	↑		↑

注1：“期末試験”：科目の全授業終了後に行われる試験を意味する。

注2：授業形態（講義、演習、実験）依存性は小さいと考える。例えば、実験科目では実験レポート内容によって、項目ごとに評価が可能と考えられる。特に“考察”の内容により「展開力」の評価も可能である。

[活性化科目]

成績評価項目	評 価 手 段				
	小テスト	中間試験	期末試験	レポート / 提出課題	
個々の知識/スキルの量 と正確性	↑	↑	↑		↑
知識体系の獲得度		↑	↑		↑
解析力/実践力/構成力	↑	↑	↑		↑

◎ 評価の際の配点基準（保証すべき「学修の質」の定量モデル）

専門科目： 法規関係科目を除き、以下の範囲内で到達レベルを評価できるように、科目毎に最適配分する。「卒業研究」にあたっては、評価項目の配点・評価手段との関係を「学科カリキュラム編成会議」を開き学科の責任で決定します。

活性化科目： 達成目標レベルを評価できるように、科目毎に最適配分します（達成度評価 100 点満点）。

応用力	展 開 力	min. 60	100
	構 成 力		
	解 析 力		
知識力	知識体系の獲得度	max.. 40	
	個々の知識の量と正確性		
評価項目		配点	
(a) 専門科目			
構成力/ 実践力/ 解析力		100	
知識体系の獲得度			
個々の知識/スキルの量と正確性			
評価項目		配点	
(b) 活性化科目			

図2 評価配点標準（「学修の質」の定量モデル）

4. 「厳格な成績評価」のための成績表記と総合成績評価指標

◎ 基本的な考え方は、次の3項にまとめられます。

- (1) 「成績評価の目的と望ましい成績評価」(「得意専門分野を見つけやすい」、「達成感を獲得しやすく意欲を湧出しやすい」)などを満たすためには、合格の点数化が望ましいと言えます。また、“きめ細やかな教育指導”を行うためには、不合格の内容が把握できることが必要です。
- (2) 但し、「基本姿勢 5. 教育の特色」“・専門領域ごとに最適設計された教育・学習プログラム”を有する学科間の転学科、他大学との単位互換、就職活動などに不可欠な成績証明書などのために、わが国の標準的な成績区分が必要です。
- (3) このため、「基本姿勢 3. 教育目的」に沿った本学の成績表記として、わが国の標準的な成績表記、総合成績評価指標 GPA を用意しています。

◎ 得点、成績表記および成績区分

得点	GP 表記	GP	成績区分	合否
90~100	S	4	秀	合格
80~89	A	3	優	
70~79	B	2	良	
60~69	C	1	可	
45~59	D	0	(不可)	不合格
0~44	E			
	F		(失格)	
	X			

GP 表記 (得点) 基準

- S : 達成目標をほぼ完全に満たしているか達成目標を超えている
- A : 達成目標を十分満たしている
- B : 達成目標を満たしている
- C : もう少し余裕が欲しいが達成目標はほぼ満たしている
- D : 達成目標を満たすためにはもう少し努力が必要だった
- E : 達成目標を満たすためにはもう一度最初からやり直す必要がある
- F : 目標達成度はD以上であるが、欠席過多等必要条件を満たさなく失格
- X : 試験放棄等、履修放棄のため失格

- ・得点は1点刻みとしますが、教員からの成績報告は、教職科目も含め全科目ともGP表記で行います。
- ・学業成績表、学科内順位、学修指導(履修単位数制限を含む)、転学科、対外的な成績区分(成績証明書など)にはGP表記、GPAを用います。

注：成績証明書には「不可」「失格」は記入しない。GPAの科目数からの「不可」「失格」科目は除外する。

5. 総合成績評価指標 GPA の算出

(1) 種類

- ・当該セメスタでの学修結果に対する GPA -S (=GPA for Semester)
- ・当該セメスタまでの学修結果に対する GPA -T (=GPA for Terms)

(2) 算出式

- ・GPA 算出対象科目は履修登録した科目である。ただし、教職科目および単位認定された科目は除く。

$$\text{GPA} = \frac{\text{科目の (単位数} \times \text{GP) の総和}}{\text{履修登録総単位数}}$$

「学修の質の保証」のために

従前より、学生諸君による授業改善アンケート、ファカルティ・デベロプメント (FD)、セメスタ制の特長活用、少人数教育の適正拡充、シラバスの充実、ティーチング・アシスタント (TA) による 授業補助、などの方策により「学修の質の保証」が図られてきました。

以上のほか、上述の成績評価結果を連動させながら、次のような履修方法に関するシステムが導入されています。詳しくは、履修ガイドの「Ⅲ. 全学共通履修ガイド」を参照してください。

(1) 履修登録上限単位数

単位修得の条件である毎回の授業のための“予習”“復習”時間を十分確保できるようにし、良い成績で単位修得を可能にするため、「セメスタあたりの履修登録単位数」に上限が設定されています。「質の高い学修」は就職や進学に必要な有効と判断し、平成 19 年度入学生から実施しています。開講単位が設定値を超えているセメスタでは、十分に検討し履修計画を立て、また登録した科目はしっかり受講することが大切です。特に履修登録漏れのないように注意してください。

- ・この制限は、単位認定科目を除く卒業要件に含まれるすべての科目が対象となります。
- ・設定値については、低学年次における得意分野の探索、高学年次における充実した卒業研究への備えが考慮されています。

(2) GPA-S による質の保証策

- ・GPA による指導、注意警告、退学勧告を以下の通りに行います。
 - a. GPA-S が 1.00 未満の者は、クラス担任により学生本人に対して次セメスタ履修登録までに指導を行い、PF 個別面談などの機会を捉え修学状況を見守ります。
 - b. 2 セメスタ連続して GPA-S が 1.00 未満の者は、学業成績を保護者に郵送する際に注意書 (学科長名) を同封します。クラス担任により学生本人および保護者に対して次セメスタ履修登録までに注意喚起、指導を行い、PF 個別面談、父母懇談会などの機会を捉え注意を喚起し、修学状況を見守ります。
 - c. 3 セメスタ連続して GPA-S が 1.00 未満の者は、学業成績を保護者に郵送する際に警告書 (学科長名) を同封します。クラス担任により学生本人および保護者に対して次セメスタ履修登録までに警告、指導を行い、PF 個別面談、父母懇談会などの機会を捉え注意を喚起し、修学状況を見守ります。
 - d. 4 セメスタ連続して GPA-S が 1.00 未満の者は、退学勧告を行います。